Indoor Environment, Vol.24, No.3, pp.177-180, 2021

査読の改善に向けて ―J-STAGE公開セミナーへの参加報告―

池田四郎[1,3)*], 徳村雅弘[2,3)]

[1)]株式会社ガステック　〒252-1195 神奈川県綾瀬市深谷中8-8-6
[2)]静岡県立大学食品栄養科学部　〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田52-1
[3)]一般社団法人室内環境学会 出版委員会

For improvement of peer review -A report on J-STAGE seminar-

Shiro IKEDA[1,3)*], Masahiro TOKUMURA[2,3)]

[1)]Gastec Corporation, 8-8-6, Fukayanaka, Ayase-city, Kanagawa 252-1195, Japan
[2)] Graduate Division of Nutritional and Environmental Sciences, University of Shizuoka,
52-1 Yada, Suruga-ku, Shizuoka-city, Shizuoka 422-8526, Japan
[3)]Committee of Publication, SIEJ

1．はじめに

J-STAGEの愛称で知られる論文公開サイトは，正式名称を「科学技術情報発信・流通総合システム」といい，国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)による電子ジャーナルプラットフォームである。日本から発表される科学技術(人文科学・社会科学を含む)情報の迅速な流通と国際情報発信力の強化，オープンアクセスの推進が目的とされ，学協会や研究機関等における科学技術刊行物の発行が支援されている。現在，国内の1,500を超える発行機関により，3,000誌以上のジャーナルや会議録等の刊行物がJ-STAGE上で公開されている。室内環境学会では，2012年6月より機関誌である「室内環境」をJ-STAGE上で公開しており，掲載された論文が会員・非会員を問わず広く閲覧，利用されている。J-STAGEにおける「室内環境」のページについては，出版委員会が管理・運用を担当している。

J-STAGEでは，当学会のような利用機関や編集担当者(エディター)をはじめ，学術出版，ジャーナル出版に関心のある人を対象としたJ-STAGEセミナーが定期的に開催されている。特に近年(2015年以降)では，「国際的プレゼンスの向上」，「オープンアクセス化」，「出版倫理」，「研究データ公開の意義」などがテーマとされ，学会誌の在り方や掲載論文がより活用されるための方策などが積極的に議論されている。国内の多数の発行機関が事例を持ち寄るだけではなく，例えばエルゼビア社など海外の大手出版社による講演が行われるなど内容が充実している。

2021年7月には，テーマを「査読の改善に向けて」とするセミナーが開催された。室内環境学会では，これまで第10巻1号[1)](川上裕司出版委員長，2007年)および14巻2号[2)](関根嘉香出版委員長，2011年)で査読方針が示されており，ここで述べられている「査読者の原則開示」が注目を浴び，当学会に対し事例紹介としての講演依頼が寄せられた。そこで出版委員会にて対応し，2021年7月28日に筆者がWeb形式で開催されたセミナーで講演を行った。本稿では，当出版委員会としての講演内容を報告するとともに，同日に行われた他の講演内容の一部を紹介し，今後の学会運営および「室内環境」誌の編集に役立つ情報を記録する。

2．セミナーの実施概要(プログラム)

13:30　開会

13:35～14:25　Fundamental principles of peer review and peer review ethics―Trevor Lane氏(出版倫理委員会(COPE))

14:25～15:00　Strategies and practices for improving peer review―Dugald McGlashan氏(INLEXIO社)

15:00～15:10　休憩

*Corresponding author（責任著者）　E-mail: ikedas@gastec.co.jp, Tel: 0467-79-3900
受付日：2021年10月27日（Received: 27 October 2021）
受理日：2021年10月29日（Accepted: 29 October 2021）

15:10〜15:40　論文査読の問題点とeLifeなどによる新しい試み―水島昇氏(東京大学)
15:40〜16:00　世界で初めて日本語によるオープンリサーチ出版を可能にした筑波大学ゲートウェイ―森本行人氏(筑波大学)
16:00〜16:20　室内環境学会における査読プロセスの透明化への試み―池田四郎氏(株式会社ガステック／東海大学)
16:20　閉会

セミナー自体はZoomを利用したオンライン形式で開催され，当日は240名の聴講者に恵まれた。

3．特に注目した論点 ―Dugald McGlashan氏の講演より―

3．1　査読の改善という目標の明確化

Dugald McGlashan氏による講演では，ジャーナルの質を高めていくための活動について説明が行われた。中でも査読の改善に対しては，最終的にジャーナルがどのようになっていることが望ましいかというゴールを意識しておくことの重要性が強調された。例えば，「より良い研究によるより良い著作(著者)」，「より良い論文により読者やユーザーのニーズを満たす」，「より良い学術的なシステムとなる」こと目指した上で，掲載論文が「誤りが少なく」，「より興味深く」，「より見識深く」，「(学会の趣旨に)より強く関連」するものとなるように査読の改善が行われていくべきだとされていた。そもそも，何をもって改善と言うのかをあらかじめ明確にしておくことが推奨され，例えば，「査読スピードが速く，効率的であること」，「査読の透明性が高いこと」，「査読が効果的であること」，「質の高い査読となること」，「個人的な偏見が少ないこと」，「より良い判断が行われること」などが例として挙げられた。

3．2　査読者のスキル・経験の見える化

また，Editorial Board Structureの作成が推奨されていた。つまり出版委員メンバーの専門性に関する表の作成による明確化である。例として，各出版委員のSubject area, Level of experience, Country, Genderが推奨される項目として挙げられていたが，意外とよくある良くないパターンとして，各項目を対象に委員を色分けした際に，大半の委員が同色となってしまうケースが例示された。各委員の専門性がカラフルになるようにチーム編成をすることで，個人的な偏見が減少し，より専門的な見解を示すことができ，様々な問題に対し異なる視点や見解からアプローチができ，さらにジャーナル自体を広いネットワークで共有できるようになるとのことだった。

3．3　著者の満足度とはいかなることか

著者側からの視点も興味深かった。著者が査読者に求めることとして，「公平であること」，「速いこと」，「厳格であること」，「妥当であること」，「プロセスが透明であること」，「一貫性があること」，「建設的で，役立ち，有益であること」が挙げられ，これらが揃っている査読であれば，仮にリジェクト判定であっても著者の満足度は高いとの指摘であった。このような著者ニーズに応えられるような，著者とのコミュニケーションが査読者に求められるとの説明であった。

3．4　事務局機能の重要性

さらに，出版委員会の事務局機能の重要性も説かれていたのが印象的であった。事務局機能は以下の観点で査読プロセスに対し極めて重要な役割を持つとのことだった。例えば，「投稿時点での投稿規程に対する適合性のチェック」，「査読プロセスの工程(スケジュール)管理」，「著者からの必要書類の収集」，「連絡用の定型文の作成，管理」などである。出版委員会活動の強化のために，事務局がいかに重要かが丁寧に説明されていた。

4．室内環境学会からの発表概要

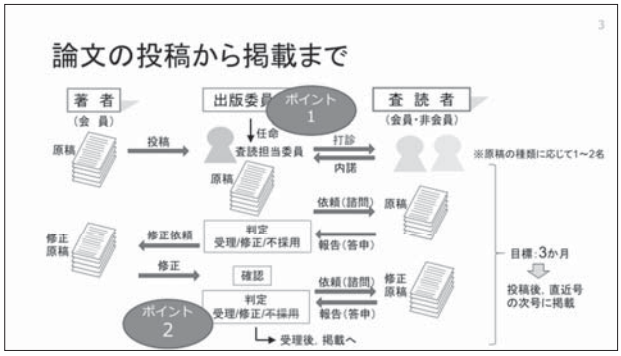
当学会からの事例紹介内容としては，1) 学会の概要，2)「室内環境」誌における投稿から掲載まで，3) 査読依頼時の方針，4) 不採用とする場合の方針，5) 投稿数・受理率・査読期間の推移，6) 査読の透明化で目指すこと，7) 査読者開示がもたらしたもの，のように構成した。

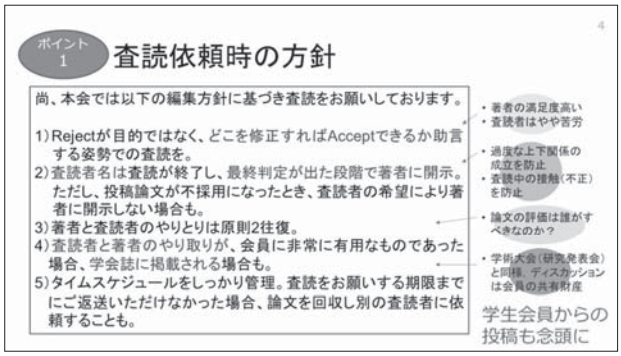
説明用に作成したスライドを以下に示すが，講演の詳細はhttps://www.youtube.com/watch?v=lyjmnoRUhBIに公開されているため，決して無理にとは言わないが，よほど余暇時間が過剰で時間を持て余す会員がもしいらっしゃれば，アクセスを検討されるのも選択肢の一つとしてよいかもしれない。なお，講演資料のスライドはhttps://www.jstage.jst.go.jp/static/files/

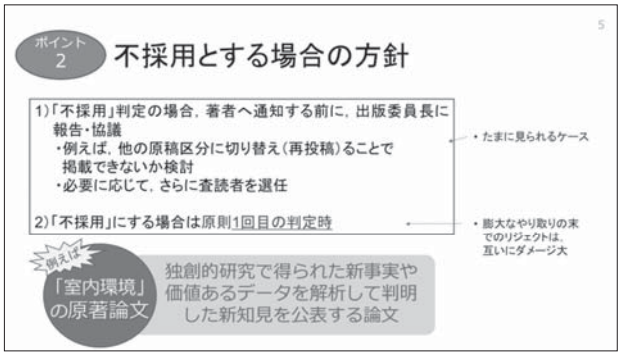
ja/pub_20210728_Seminar05.pdfからも閲覧可能である。

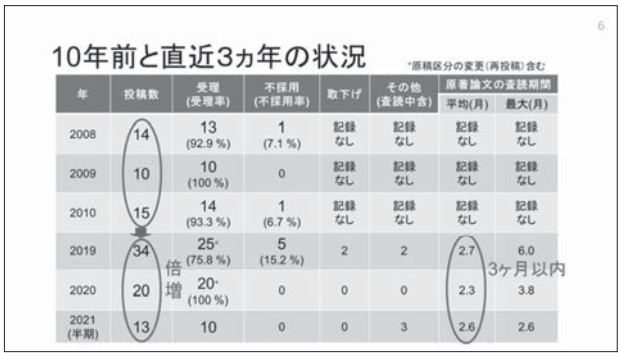
講演後に，筆者に対し以下のような質問が寄せられ，応対した。

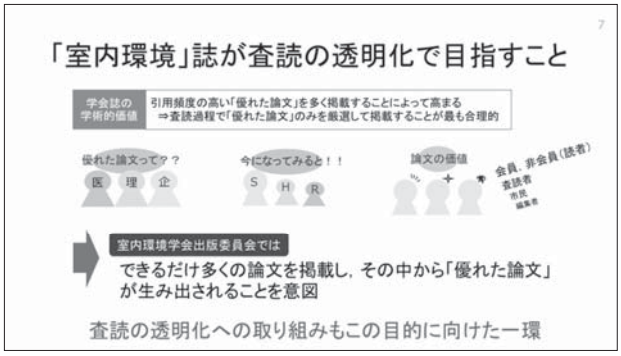
- 産学官民連携活動や文理融合活動を進めており，非常に参考になりました。
- 小規模研究会での査読のありかたについて模索しているところだったので，実践報告として大変参考になりました。
- ジャーナルの規模が大きくなると実施が難しい点はありますが，落とすためではなく掲載するための査読を心がける基本的な姿勢からは学ぶところがあると思いました。

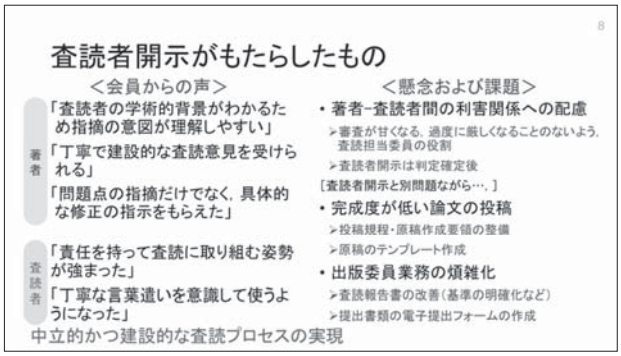












謝辞

本報告内容は，JST主催のJ-STAGEセミナーでの講演内容に基づく。講演機会を頂戴しただけでなく，講演の準備および実施にご助力下さった，国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)情報基盤事業部研究成果情報グループの各位，ならびにご担当の小川ゆい氏に対し，記して深く感謝を申し上げます。

引用文献

1) 川上裕司：編集委員会の編集方針と編集委員の紹介，室内環境，10(1)，85-87(2007).
2) 関根嘉香：学会誌投稿論文の査読方針について，室内環境，14(2)，152-153(2011).